

Title	エスノメソドロジーによる戯曲内容の分析—チャーホフ『桜の園』を題材にして—
Author(s)	島田, 浩樹
Citation	
Issue Date	2002-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/350
Rights	
Description	Supervisor: 藤波 努, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

エスノメソドロジーによる戯曲内容の分析 —チェーホフ『桜の園』を題材にして—

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識社会システム学専攻

島田 浩樹

2002 年 3 月

修 士 論 文

エスノメソドロジーによる戯曲内容の分析 —チェーホフ『桜の園』を題材にして—

指導教官 藤波 努 助教授

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識社会システム学専攻

950047 島田 浩樹

審査委員： 藤波 努 助教授（主査）
 國藤 進 教授
 西本 一志 助教授
 伊藤 孝行 助教授

2002 年 2 月

目 次

はじめに	1
第1章 序論	3
1. 1 はじめに	3
1. 2 研究の背景と目的	3
1. 3 研究の意義	4
1. 4 本論文の構成	4
第2章 エスノメソロジーとは何か	6
2. 1 はじめに	6
2. 2 エスノメソロジーの歴史的概要	6
2. 3 エスノメソロジーの定義	7
2. 4 エスノメソロジーの研究対象	7
第3章 戯曲『桜の園』の分析	8
3. 1 はじめに	8
3. 2 『桜の園』の概要とあらすじ	8
3. 3 『桜の園』の会話の特徴	10
3. 4 エスノメソロジーにおけるリアリティ分離という考え方	12
3. 5 リアリティ分離の視点からの分析	13
第4章 考察	19
4. 1 はじめに	19
4. 2 リアリティ分離	19
4. 3 関連研究との比較	20
第5章 知識変換プロセスにおける共同化との関連	21
5. 1 はじめに	21
5. 2 組織的知識創造理論	21

5. 3	知識変換プロセスにおける共同化との関連	22
5. 3. 1	知識変換プロセス	22
5. 3. 2	共同化とリアリティ分離との関係	23
5. 4	今後への示唆	23
	参考文献	25
	謝辞	

図 目 次

3. 1	登場人物リスト	9
5. 1	知識変換プロセス	23

表 目 次

2. 1	アルゴリズムで用いる集合	11
------	--------------	----

はじめに

私たちは、日常生活のなかで、暗黙のうちにいろいろな活動を行っています。ある人は、朝起きた後、顔を洗い、歯を磨き、それから朝食の席に座る。もしかしたら、その人は、朝食の時、新聞に目を通しながら、あるいはテレビを見ながら食事をおられるかもしれません。また現在は、少なくなっていると言われていたとはいえ、家族揃って楽しく話を弾ませながら食事をしている人もいることでしょう。他にも日常生活のなかで普段の活動例を上げようと思えば、ごみ捨て、井戸端会議、切符の買い方、バスの乗り方、風呂の入り方などなど、無限とはいかないまでも、多種多様な膨大な数に及ぶ事例が頭に浮かぶことと思います。

私たちは、このように日常生活において多種多様な活動を、様々な時、様々な場所で行っています。もしそれらの活動を一つのリストにしてまとめて一瞥したなら、きっと自分の力だけで全ての活動を行えることに一種の不思議さを感じるかもしれません。しかし、私たちは、その膨大な日常的な活動をほとんど暗黙のうちに成し遂げてしまっているのです。それは、普段、あまりにも当たり前なので、別段取り立てて騒ぐこともないようにも思えます。しかし、そのあまりに当たり前の部分こそ、人間の存在を根底から基底している何かがあるのです。それは、目にはなかなか見えないものですが、私たちにとって大切なものを教えてくれるはずです。

ところで、私がこの研究で題材としているものは、『桜の園』という 19 世紀後半から 20 世紀初頭において活躍したアントン・チェーホフという作家、戯曲家が書いた作品です。戯曲というのは、演劇の舞台のシナリオですが、その戯曲を具体的に表現する演劇は、ある意味私たちの日常から大きく離れているものとも言えます。日本の現代演劇のリーダーの一人である平田オリザさんは、『演劇入門』という自著のまえがきのなかで印象的なことを述べています。ここでは、演劇そのものではなく演劇の技術について述べたことに注意していただいたうえでその言葉を以下に引用します。

演劇の技術とは、「自分の妄想を他者に伝える」技術である

私は、この言葉を最初に見たときかなり驚きました。一体何に驚いたかたというと妄想という私たちの一般的な常識からあまり好ましいとは思えない概念を堂々と肯定してしまっているところです。それだからこそ、演劇は日常から大きく離れているという隠れた傍証になるとも言えますが、ともかくも、演劇の本質を感じさせてくれる言葉だと思います。

私は、その演劇の基礎となる戯曲を分析することで、私たちがなかなか気づくことの少ない日常になんらかの示唆を与えられればと考えています。なんで日常的なことを最初からやらないで戯曲をやるのかという声が聞こえてきそうですが、言われてみれば確かにその通りだと思います。これもひとえに筆者の怠惰のせいなのですが、あえて後付けに理由を言わせてもらえば、戯曲という非日常に対して日常を深く理解する方法を用いることによってまったく違った発見ができるのではないかという気持ちからです。“非日常がゆえに日常に資する”、という逆説的な響きの良い言葉を書いてはみましたが、正直やってみないとどうなるのかは良く分かりません。しかし、このようなやや“変った”研究を見て、少しでも様々な研究に挑戦する勇気を少しでも与えることができるなら、この研究にもそれなりに意義のあることのようにも思えます。

第 1 章 序論

1. 1 はじめに

この章では、まず研究の背景、研究の目的、その後研究の意義を述べる。

1. 2 研究の背景と目的

我々は、普段何気なく接している日常において無意識のうちに使っている知識に対して、深い関心を寄せることはなかなか難しい。それは、我々が日常的に使っている無意識のうちに使う知識は、人と人との間で毎日繰り返し行われる交流のなかでは、当然の前提とされており、それに対してわざわざ反省を試みるようとする必要性や動機づけは全くないからである。しかしながら、1990年代に入ると経営学の立場から、そのような無意識に使っている知識に対する関心が急激に高まっていった。それは、Nonaka&Takeuchi（1995）による知識創造理論のなかで、知識創造プロセスにおける暗黙知¹の重要性が指摘されたことが大きい。そもそも社会における知識そのものの重要性は、Toffler（1990）やDrucker（1969, 1993）などといった先覚的な社会評論家たちによって主張されてはいた。しかしながら、知識に対する関心は、表面的に知覚しやすい、扱いやすい知識に限られており、暗黙知などの暗黙の部分にまで及

¹ 暗黙知の概念の重要性を示した Micheal Polanyi は、暗黙知を分析するもととなった被験者に電気ショックを与える実験のなかで、被験者が電気ショックによる刺激から回避するために行う無意識な行動に着目し、そこから暗黙知の概念を洗練させている。

ぶことはなかった。さらに客観的なデータを中心として実証的研究を行うことを良しとする伝統的な社会科学においては、暗黙的な部分に注目することは、その研究姿勢の制約上、大変難しかった。しかし、そのような伝統的な社会科学の姿勢に対して、社会科学の一分野である社会学のなかから反省を促す動きが出てきた。その結果としてエスノメソドロジーと呼ばれる研究に対する一つのあり方が生まれた。
(Garfinkel,1967)

近年では知識への関心の高まりとさきに述べた暗黙知への認識の広まりから、暗黙的知識の研究は、経営学を中心に徐々に行われるようになってきた。本研究でも、そのような研究の関心の流れに従いながら暗黙の部分の知識に焦点を当てようとする。そして、その暗黙の部分への一つのアプローチの方法としてエスノメソドロジーという視点を導入する。そして分析する対象を『桜の園』という戯曲を題材にして研究を進め、その分析の結果と知識創造理論における共同化との関連を探る。

1. 3 研究の意義

知識創造理論における共同化と呼ばれる段階において、戯曲という分かりやすく誰にでも入手できる題材を用いることで、共同化の阻害要因の検討とその解決に示唆を与えることが期待できる。副次的には、戯曲という非日常的な題材を用いることで、日常的な分析対象を指向するエスノメソドロジーの分析対象に新たな方向性を示すことも期待できよう。

1. 4 本論文の構成

本論文の構成は、以下に述べる通りである。まず、第2章においては、今回の分析の視点となるエスノメソドロジーについて概観する。そして第3章において戯曲

『桜の園』を使って、実際にエスノメソドロジーの視点による分析を行う。第4章では、第3章で行った分析の考察、関連研究との比較、第5章では共同化とリアリティ分離との関連を検討し、最後に今後への示唆を述べる。

第 2 章 エスノメソドロロジーとは何か

2. 1 はじめに

この章では、本論文で重要となるエスノメソドロロジーについて述べる。まず、エスノメソドロロジーの歴史的概要に触れ、その後、エスノメソドロロジーの定義を行い、最後にエスノメソドロロジーの研究対象に触れる。

2. 2 エスノメソドロロジーの歴史的概要

エスノメソドロロジーは、1960年代に Harold Garfinkel (1967) が創始し、彼の在籍したカリフォルニア大学ロサンゼルス校を中心に、他のカリフォルニア大学のキャンパスも巻き込んだアメリカ社会学の一つの流れである。(Coulon,1987) その思想的源流は、Edmund Husserl が創始した現象学、その影響を受けた Alfred Schutz の現象学的社会学²、シンボリック相互作用論³などに求めることができる⁴。その後エスノ

² 社会的経験の分析に現象学の方法を用いようとする事、またその理論。基本的には、シュッツの影響の強かったアメリカ社会学の一つの流れを指すことが多い(江原, 1988)。

³ シンボリック相互作用論という言葉は、1937年にハーバート・ブルーマーの論文の中で使われた造語である。後藤(1991)のブルーマー著『シンボリック相互作用論』の翻訳解説のなかにあるシンボリック相互作用論の要約によると、その基本的な特徴は、社会的相互作用の過程そのものを分析の対象とし、質的社会調査法を重視し、社会的行動の意味的・シンボリック的局面を重視した社会理論をいう。

メソドロジは、イギリス、ドイツ、イタリア、フランスなどヨーロッパへと渡り、日本には、1980年代の後半⁵から本格的に紹介された。現在では、一つの社会学の分野として認知され、社会学のみならず、法社会学や教育社会学など他の学問分野に対してもエスノメソドロジの視点が導入されている。

2. 3 エスノメソドロジの定義

エスノメソドロジの基本的定義は、我々にとってありふれた社会的事実に注目し、その社会的事実を無意識のうちに実現させている“人びとの方法”（好井,1999）あるいは日常知（Leiter, 1980）を研究対象とし、その日常的活動の奥に潜む微細な意味、社会的構造を明らかにしていくことである。

2. 4 エスノメソドロジの主な研究対象

エスノメソドロジの研究対象は、伝統的 sociology のなかでは残余カテゴリー（Leiter, 1980）として扱われることが少なかった、人びとのありふれた日々の営み、あるいは我々の一般的視点からは奇異に写るようなことをその主な対象とする。それは、更正施設の収容者や受刑者（Wieder, 1974）であったり、車に対して特別の愛着を持つ若者（Sacks, 1979）であったり、両性の特徴をもち、そこから女性として生きようとする人間（Garfinkel, 1968）の話などと、様々である。それらは、一般的な社会学、あるいは社会科学全般において、振り返られることの少なかった対象であり、エスノメソドロジでは、そのような対象をあえて分析の対象とすることで、我々の現実の多元性、複数性、相対化を徹底的に推し進めようとしている。

⁴ 他にも、創始者の Garfinkel によれば、彼が博士論文の指導を受けた Talcott Parsons の理論から多くの示唆を得たという（Garfinkel, 1967）。

⁵ 山田富秋・好井裕明編 1998『エスノメソドロジの想像力』せりか書房, 72 頁参照

第 3 章 戯曲『桜の園』の分析

3. 1 はじめに

この章では、具体的に『桜の園』の分析を行う。まず分析を行う前に『桜の園』の概要とあらすじを簡単に述べる。その後に『桜の園』の会話の特徴を述べ、その特徴をうまく説明できるエスノメソドロジーの考え方について説明し、その考え方に基づいて『桜の園』を分析する。まとめとその考察は次章で述べる。

3. 2 『桜の園』の概要とあらすじ

戯曲『桜の園』は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活躍したロシアの作家、戯曲家アントン・チェーホフの生前最後の作品である。『桜の園』の完成後、程無くして作者のチェーホフが亡くなったが、その後もこの戯曲は世界中の人びとに親しまれ、日本においても 1915 年 7 月に、東京帝国劇場で上演されて以来、多くの愛好者を生み出している。『桜の園』は、シェークスピアの『ハムレット』と並んで、近代演劇中のスフィンクスと評価する論者（中村，1979）もあり、演劇を志す多くの若者たちにとって避けては通ることのできない作品とされる。

『桜の園』は、全部で四幕あり、一般的にこの戯曲は、作者の意向を汲んで、喜劇であると解釈されている。話のあらすじは、パリから五年ぶりにロシアに帰ってきたラ

ネーフスカヤ夫人が、自ら所有する『桜の園』が競売にかけられることを知り、その競売の日までの日々を、『桜の園』を取り巻く様々な個性を持った人々が複雑な感情を交えながら織り成していく人間劇である。

次に後の分析を理解するための便宜として、『桜の園』に出てくる登場人物を以下に記す。

図3-1

登場人物

ラネーフスカヤ（リュボーフィ・アンドレーヴナ）女 地主

アーニャ ラネーフスカヤの娘、女 十七歳

ワーリャ ラネーフスカヤの養女、女 二四歳

ガーエフ（レオニード・アンドレーヴィチ） ラネーフスカヤの兄

ロパーヒン（エルモライ・アレクセーヴィチ） 実業家

トロフィーモフ（ピョートル・セルゲーヴィチ、愛称ペーチャ） 大学生

ピーシク（シメオーノフ＝ピーシク、ボリス・ボリーソヴィッチ） 地主

シャルロッタ（イワーノヴナ）女 家庭教師

エピホードフ（セミョーン・パンテレーヴィチ） 事務員

ドウニャーシャ 女 小間使い

フィールス 老従僕、八七歳

ヤーシャ 若い従僕

通りがかりの男

駅長

郵便局の官員

男女の来客と召使たち

チェーホフ（小野理子訳）『桜の園』岩波文庫 pp.8, 9 から抜粋、改良

ここで出てくる登場人物によって、この物語は展開されていく。

3. 3 『桜の園』の会話の特徴

『桜の園』の会話の特徴を全体的に俯瞰すれば、他の戯曲ではあまり見られないおもしろい傾向が見られる。一般的に台詞の形態、例えば映画、演劇、オペラ、漫才、テレビドラマ等の登場人物は、その台詞のなかで意味ある会話の“やりとり”を行っている。ところが、『桜の園』に関しては、意味のある会話の“やりとり”が大変少ない。それは、独白的であったり、ナンセンスであったり、おかしい行動であったりするが、基本的にお互いに話がかみ合うことは少なく、ちぐはぐした傾向が第一幕から第四幕まで続いていく。やや長くはなるが次にその代表的な例を示す。

ガーエフ リューバ、君はこの本棚の年齢を知っているか？先週、僕は下の引出しを抜いたんだが、見ると焼き印が押してあった。きっかり百年前の製作なんだ。どうだい、ええ？お祝いをしてやってもいいくらいさ。命あるもの、というわけではないが、なんてったって本棚なんだから。

ピーシク（感心して）百年……こりゃ驚いた！

ガーエフ たいしたもんだよ。（本棚を撫でる）尊敬すべき本棚君！百年に余る、善と正義の清き理想に捧げられた君の存在に、挨拶を送るよ。実りある仕事をなせ、との君の無言の呼びかけは、百年来いささかも衰えることなく、わが一族の幾世代をして（涙声になる）、勇氣とよりよき未来への信念を養わせ、善意と社会的自覚の理想を、^{はぐく}育みつづけたのだ！
（ややあって）

ロパーヒン なあるほど……

ラネーフスカヤ 兄さんは、相変わらずねえ……

ガーエフ（いささかバツが悪くなって）玉から右角へ！カットして真ん中へ！

ロパーヒン（時計を見る）ああ、もう行かなくては。

ヤーシャ（ラネーフスカヤに薬を渡す）お薬を上がったほうがよろしいのでは……

ピーシク そんなもの上がらんほうがよろしい、奥さん。毒にも薬にもなりません。こちらへお寄越しなされ。（受け取って錠剤をてのひらに全部あけ、フッと息を吹きかけて、口に放りこむ。クワスで飲み下す）これでよし。

ラネーフスカヤ（仰天して）あなた、気はたしかなの！

ピーシク すべて服用致しました。

ロパーヒン すげえ胃袋だ。
全員笑う。

これは、小野理子訳、岩波文庫されている『桜の園』をそのまま引用したものである。この場面は、第一幕であり、ラネーフスカヤがロパーヒンから自らの所有する『桜の園』が売りに出されること、それを止める方法について話を受けこと、その話にガーエフが不満を口にしたこと、その後4人の登場人物がそれぞれ一度ずつ台詞を言ったあとの出来事である。ここでガーエフが最初にリューバと言っているのは『桜の園』の女主人ラネーフスカヤを指す。ここでは、まずガーエフが、本棚についての独自の思いを独白している。その後ラネーフスカヤにその事を暗に指摘されると、バツが悪くなったのか、全く意味不明な言葉を言う。その後ロパーヒン、ヤーシャと前の台詞とは繋がりのない言葉を言った後、ピーシクがラネーフスカヤから薬を取り上げ、それを全部飲んでラネーフスカヤを驚かし、ロパーヒンが皮肉とも感嘆ともとれぬ言葉で終るものである。

ここで思い出して欲しいのは、この場面は、もともとラネーフスカヤの所有する『桜

の園』が競売にかけられるという一般的な常識からは深刻と思える場面でさえ、『桜の園』の登場人物は、同じ調子でちぐはぐした話を続けている。一見日常的にも思える状況の深刻さと実際に現れる状況のちぐはぐさは、実際には日常生活で見出し難い。よってマージナルな現象を研究の対象とすることを好むエスノメソドロロジーの視点からは、『桜の園』で見られる現象が大変興味深いものに思えてくるのである。そこにエスノメソドロロジーを用いて分析する意義が存する。

3.4 エスノメソドロロジーにおけるリアリティ分 という考え方

ここで、実際にエスノメソドロロジーの視点を用いた分析を行っていくなかで、ひとつの分析の枠組みとなる考え方を紹介する。メルヴィン・ポルナー（1975）は、「お前の心の迷いですーリアリティ分離のアナトミー」という論文のなかで、論文の副題にもある通りリアリティ分離という概念を提出している。これは、ある複数の観察者が同じ世界、空間を共有しているにも関わらず、各々の観察者にはそれぞれ異なった経験として現れてくることをいう。次にこの異なった経験に直面した観察者は、どのように対応をするのかという判断に迫られる。それは、自我の世界経験が正しく、他我の世界経験が間違っているのか、それとも、他者の世界経験が正しく、自我の世界経験が正しいのかという問題である。ポルナーは、さらにこのようなリアリティ分離には、根本的な両義性がつきまとっているとしている。

ここで私が、エスノメソドロロジーの多様な分析概念のうちリアリティ分離を選んだ理由は、二点ある。第一にこのリアリティ分離こそが、『桜の園』の会話の全体的な特徴を示すちぐはぐさを理解する上で有益になると考えたこと。第二にこのようなリアリティ分離は、現実の世界にも頻繁に起こっており、それに対して何らかの示唆を与えられると考えたこと、である。

3. 5 リアリティ分離の視点からの分析

それでは次に『桜の園』においてリアリティ分離が顕著だと思われるシーンを抜き出し、それについて分析する。以下に長いがその部分を示す。この場面では、ラネーフスカヤの領地が手離されることを防ぐため、ロパーヒンが、領地を別荘地として貸し出すことをしきりに提案しているところである。
理解の便宜のためにここで登場する三人を簡単に紹介する。

ラネーフスカヤ 『桜の園』を含む広大な領地の主で、莫大な借金のためその領地も競売にかけられようとしている。性格は天真爛漫で、他者に対する同情心も溢れている。しかし世の中の仕組みについては大変疎い。

ガーエフ ラネーフスカヤの兄。大変な饒舌家で、エリート意識が強い。ロパーヒンが金持ちであることを妬みかつ見下している。

ロパーヒン 実業家。資産家。祖父も父親もラネーフスカヤ家の農奴として働いていたため、ラネーフスカヤに対しては、愛情と同時にいくらかの憎しみという複雑な感情を抱いている。

ロパーヒン お宅の領地を、あの大金持ちのデリガーノフがほしがっています。競売には自身出向いて来るそうで……

ラネーフスカヤ あなた、それをどこで聞いたの？

ロパーヒン 町で皆が言っています。

ガーエフ ヤロスラヴリの叔母さんが、金を出すって言うてくれてんだが、いつ、い

くらくれるかはわからん……

ロパーヒン いくら送ってこられます、十万ですか、二十万ですか？

ラネーフスカヤ さあ……せいぜい一万か一万五千、それでも御^{おん}の字よ。

ロパーヒン 失礼ですが、お二人のように呑気な、浮き世離れしたお方には、これまで出会ったこともありません。お宅の領地は売られるんだと、こうしてちゃんとロシア語で申し上げているのに、まるっきりおわかりにならない。

ラネーフスカヤ じゃ、どうすればよろしいの？ちゃんと教えて下さいな。

ロパーヒン 毎日毎日お教えしてるじゃないですか。それも同じことを……。桜の園も土地も別荘用に貸すほかはない、それも即刻手を打つ必要がある、競売は目の前なんだからって……。わかって下さいよ！別荘の件で決断さえなされば、金はいくらでも貸してくれます。それで皆さんは助かるんです。

ラネーフスカヤ でも別荘に別荘族なんて、低級なのよねえ、悪いけど……

ガーエフ わしもまったく同意見だね。

ロパーヒン わたしは大声で泣くか、叫ぶか、卒倒しそうです。やってられん！もう限界だ！（ガーエフに）あんたは女の腐ったような人だ！

ガーエフ あん？

ロパーヒン 女の腐ったのです！（立ち去ろうとする）

ラネーフスカヤ （おびえたように）いえいえ、行かないで。ここにいらしてちょうだい。お願いよ。何かいい考えが浮かぶかもしれないわ。

ロパーヒン どう考えようってんです！

ラネーフスカヤ お願いだからいて下さいな。御一緒だと、いくらかでも元気が出るから……

（ややあって）わたしには、虫の知らせっていうか……今にも頭の上に建物が崩れおちてくるような気がするの……

ガーエフ（深いもの思いの体で）空クッションで角へ、クロスして真ん中へ……

ラネーフスカヤ わたしたちもずいぶん罪を作ってきたから……

ロパーヒン 奥様にどんな罪があるとおっしゃるんです……

ガーエフ（ドロップを口に入れる）わしは、ドロップで自分の財産を食いつぶした、と言われとるよ。（笑う）

この直後ラネーフスカヤが、自らの罪について語る。しかしその後、音楽の話に話題が移り、『桜の園』をどうするのかうやむやになったまま話は展開していく。ここで以上で引用した台詞の部分をリアリティの分離の観点から分析していく。

まずロパーヒンが、ラネーフスカヤの領地を別荘用に貸すことを勧めるため、やわらかい口調で次のように述べる。

ロパーヒン お宅の領地を、あの大金持ちのデリガーノフがほしがっています。競売には自身出向いて来るそうで……

この台詞では、ロパーヒンは、直接領地を別荘用に貸すことを勧めてはいないが、ラネーフスカヤの危機感を抱かせ、ロパーヒンの考え通りに事を運ばせようとしてい

ることは明らかである。それに対してラネーフスカヤは、

ラネーフスカヤ あなた、それをどこで聞いたの？

と聞き返す。ロパーヒンの思惑通りにラネーフスカヤが危機感を抱いたことが分かる。これに対してロパーヒンは、

ロパーヒン 町で皆が言っています。

と無難な返答を返す。これをエスノメソドロジカルに解釈すれば、これは、「私が勝ってに言ってるんじゃないくて町の皆が言っているんだから、例え私が、間違っていたとしても、私に責任はない」、と解釈できる。この時点では、はっきりと分かる形でリアリティ分離が起きているわけではない。しかし次のガーエフ、ロパーヒン、ラネーフスカヤのやりとりからリアリティ分離が見て取れるようになる。

ガーエフ ヤロスラヴリの叔母さんが、金を出すって言ってくれてんだが、いつ、いくらくれるかはわからん……

ロパーヒン いくら送ってこられます、十万ですか、二十万ですか？

ラネーフスカヤ さあ……せいぜい一万か一万五千、それでも御^{おん}の字よ。

ロパーヒン 失礼ですが、お二人のように呑気な、浮き世離れしたお方には、これまで出会ったこともありません。お宅の領地は売られるんだと、こうしてちゃんとロシア語で申し上げているのに、まるっきりおわかりにならない。

このあたりから、領地が売られるという状況に対してラネーフスカヤとガーエフの無頓着さとロパーヒンの実業家としての切迫感の違いがはっきりと読み取ることができる。ロパーヒンは自らの世界経験を絶対のものとして捉えている。しかしこのような状況で危機感をもたないガーエフとラネーフスカヤに対して苛立ちを感じてい

る。そこでガーエフとラネーフスカヤの世界経験を皮肉という形で攻撃し、自らの世界経験に適合させようと圧力を掛けている。次のラネーフスカヤの言葉は、リアリティ分離を強いものにしていく。

ラネーフスカヤ　じゃ、どうすればよろしいの？ちゃんと教えて下さいな。

ロパーヒン　毎日毎日お教えしてるじゃないですか。それも同じことを……。桜の園も土地も別荘用に貸すほかはない、それも即刻手を打つ必要がある、競売は目の前なんだからって……。わかって下さいよ！別荘の件で決断さえなされば、金はいくらでも貸してくれます。それで皆さんは助かるんです。

ラネーフスカヤのこの態度は、ロパーヒンの世界経験にとって、ほとんど信じられないことのように写る。ただここで注意が必要なのは、ラネーフスカヤも自分自身の世界経験に照らしてみても何も間違ったことをしていないことである。そして次の話によってお互いのリアリティ分離は決定的になる。

ラネーフスカヤ　でも別荘に別荘族なんて、低級なのよねえ、悪いけど……

ガーエフ　わしもまったく同意見だね。

ロパーヒン　わたしは大声で泣くか、叫ぶか、卒倒しそうです。やってられん！もう限界だ！（ガーエフに）あんたは女の腐ったような人だ！

ガーエフ　あん？

ロパーヒン　女の腐ったのです！（立ち去ろうとする）

領地が競売にかけられる状況に際して、ラネーフスカヤとガーエフは、自らの世界経験に固執し、ロパーヒンも同じように自らの世界経験に固執する。ただロパーヒンの方は、自らの世界経験の方が、ラネーフスカヤやロパーヒンのそれよりも正しいと

強く信じているため、皮肉や罵声を彼らに浴びせることで彼らの非常識さと無理解（あくまでロパーヒンの側から観て）を攻め立てる。

次の場面からは、各々の心情を勝ってに述べ合うようになる。

ラネーフスカヤ （おびえたように） いえいえ、行かないで。ここにいらしてちょうだい。お願いよ。何かいい考えが浮かぶかもしれないわ。

ロパーヒン どう考えようってんです！

ラネーフスカヤ お願いだからいて下さいな。御一緒だと、いくらかでも元気が出るから……

（ややあって）わたしには、虫の知らせっていうか……今にも頭の上に建物が崩れおちてくるような気がするの……

ガーエフ（深いもの思いの体で）空クッションで角へ、クロスして真ん中へ……

ラネーフスカヤ わたしたちもずいぶん罪を作ってきたから……

ロパーヒン 奥様にどんな罪があるとおっしゃるんです……

ガーエフ（ドロップを口に入れる）わしは、ドロップで自分の財産を食いつぶした、と言われとるよ。（笑う）

ロパーヒンは、ピントのずれたように感じたラネーフスカヤの言葉を真に受けて、むきになって言い返す。ラネーフスカヤは、自らの世界経験に入っていく、やや情緒的な気分になる。ガーエフも、同じように自らの世界経験のなかに入り貴族としてのゆとりと誇りを保とうとしている。

以後、この話は、同じような流れで進み、結局ラネーフスカヤの領地は、皮肉にも必死にアドバイスをし続けたロパーヒンの手に渡る。

第 4 章 考察

4. 1 はじめに

この章では、先に行った分析結果から 2 つの点で考察を行い、その後、『桜の園』の関連研究との比較をし、最後に今後への示唆を述べる。

4. 2 リアリティ分離

まず最初に今回の分析結果から、リアリティ分離の発展の過程について考察する。今回の分析結果からみえたことは、リアリティ分離は、始めの段階では、それほど大きいものではないこと。リアリティ分離は、会話を通して大きくなる可能性もあること。そしてリアリティ分離を大きくしていくものは、自我の世界経験の絶対化とその経験の過度の一般化、その過度の一般化に対する防御として自我の世界経験への逃避が大きな要因となっていること、が考えられる。その結果、リアリティ分離は維持、発展され、修復が難しい状況になった。

次にリアリティ分離の解決についてであるが、この分析結果からははっきりとした道筋が見えてこなかった。ただロパーヒンが、自らの世界経験を絶対のものとして、ラネーフスカヤやガーエフに皮肉や罵声などの攻撃を仕掛けることで、自らの世界経験に無理やり適合させようとする行動が見られた。しかしながら、この場合は、リアリティ分離を解決する方向には向かわず、逆に発展させてしまう結果となった。

4. 3 関連研究との比較

過去に『桜の園』をエスノメソドロジーの視点から分析したり、あるいは戯曲を同じように分析した先行研究は見当たらない。そこで『桜の園』を主題に分析した中村雄二郎の研究との比較をし、本研究の特徴を明らかにする。

中村の『桜の園』論のねらいは、主に『桜の園』の全体的な構造の把握にある。従来の日本における『桜の園』の情緒的な解釈から離れて、作劇的原理の本質的な部分に進もうとする。その考察のなかで、中村は、『桜の園』の作劇的原理の中心をなすのは、ナンセンス的状况の把握と認識と表現であるとする。ナンセンス的状况とは、絶対的な価値体系や倫理規範を欠くことによって人間と人間との結びつきが失われ、連帯が破れてばらばらになった状況であると説明する。そしてそういう状態に陥った人間は、ちぐはぐな言葉と行為を発することを述べ、『桜の園』の特徴とその本質的原因をうまく説明している。

中村の論考と本研究を比較して気づく点は、中村のそれは『桜の園』を全体的な視野で捉え、全体的な構造として把握しようとするのに対して、本研究では、全体の一部を細かく解釈し、そのなかから話の構造を動的なプロセスとして把握しようとするところにある。それは、お互いの視野の行き届かない点を補完するものであるといえよう。

第 5 章 知識変換プロセスにおける 共同化との関連

5. 1 はじめに

まず知識変換プロセスにおける共同化との関連を説明する前に、知識変換プロセスを形作る組織的知識創造理論の概要を説明する。その後、共同化とリアリティ分離の関連を説明し、最後に今後への示唆を述べてこの稿を終える。

5. 2 組織的知識創造理論

組織的知識創造理論（Nonaka & Takeuchi, 1995）とは、企業の競争力の源泉を知識であるという観点から、企業における知識の獲得・創造・活用・蓄積というプロセスを通して、組織的に知識が創造されるというものである。

組織的知識創造理論において扱われる知識には、暗黙知と形式知の二つの種類がある。暗黙知は、言葉や文章で表現しにくい身体的、主観的な個人的知識のことである。暗黙知は、五感では捉えにくい性質のゆえ他者が模倣することが困難な知識である。一方、形式知は、言葉や文章で表現できる理性的、客観的な知識のことである。形式知は、五感で捉えることが可能なので、他者が模倣することが容易な知識である。

さらに組織内において知識創造プロセスが円滑に行われるためには、以下の要素が必要とされる。それは、知識変換プロセス、場、知識資産、の三つである。知識変換プロセスについては、後に述べるので、ここでは場と、知識資産、そしてこれら三つの関係について簡単に触れる。

場とは、時や場所、人間と人間との関係性が共有された空間であり、知識の創造の根底を支えるものである。そして知識資産は、その“場”から生み出された、目に見えない様々な無形の知識であり企業の究極的な競争力の源泉とされる。

これら三つの要素は、互いに不可分に結びついており、これら全体で「知識創造プロセス」を構成している（野中・遠山・紺野，1999）。

5.3 知識変換プロセスにおける共同化との関連

5.3.1 知識変換プロセス

本研究においては、知識創造プロセスの要素の一つである知識変換プロセスの、共同化の部分が重要である。知識変換プロセスとは、暗黙知と形式知のダイナミックな相互作用によって新たな知識が創造される（Nonaka & Takeuchi, 1995）プロセスをいう。その知識変換プロセスには四つのモードがあり、その四つのモードは、共同化、表出化、連結化、内面化である。下にその定義と図を示す。

共同化： 言葉で表すことが難しく、他者が模倣しにくい個人的な知識を理解や共感を通じた共同体験（Nonaka & Takeuchi, 1995）によって暗黙知を創造、獲得する段階

表出化： 暗黙知から、言葉、図、など明示的に表現された新たな概念、コンセプトを創造する段階

連結化： 既存の知識や、新たに創造された概念、コンセプトを体系化して新たな形式知を創造する段階

内面化： 戦略・戦術・革新・改善についての概念や手法を具現化させるために、個

人に体得させるプロセス（野中，1999）

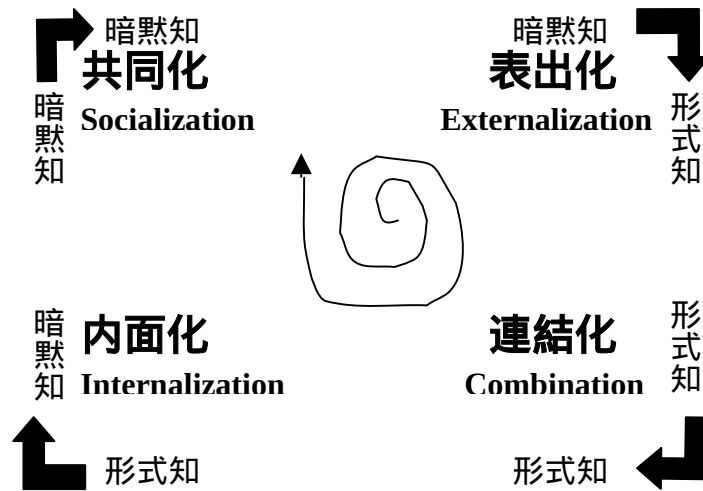


図 5. 1 知識変換プロセス 近藤（2001）参考

5. 3. 2 共同化とリアリティ分離との関係

共同化は、上の定義で示したように言葉で表現することが難しく他者が模倣しにくい個人的知識を理解や共感を通した共同体験によって暗黙知を創造、獲得することであるが、このプロセスでは、他者の思考、感情、信念といった他者の世界経験に入っていく能力が要求される。

一方リアリティ分離は、複数の観察者が同じ世界、空間を共有するにも関わらず、まったく異なった経験として現れてくることをいう。さらに前章の分析にもあったように自らの世界体験を絶対化することで、リアリティ分離を発展させる。そのことは、共同化で必要とされる相手の世界経験に入っていくことが妨げられる。よってリアリティ分離の問題は、共同化のプロセスを阻害する要因として考えられる。

5. 4 今後への示唆

以上の考察から共同化の阻害要因であるリアリティ分離の問題の解決は、そのまま共同化の促進要因になると考えられ、そのことが知識変換プロセスの他の三つのモードにも好影響を及ぼし、知識創造プロセスの活性化に繋がると考える。

参 考 文 献

- Atkinson, J. M. and Heritage, J. eds 1984 Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis :1-15 Cambridge, Cambridge University Press
- Blumer, H. 1991 (後藤将之訳)『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法』勁草書房
- Chekhov, A. 1998 (小野理子訳)『桜の園』岩波文庫
- Coulon, A. 1996 (山田富秋・水川善文訳)『入門エスノメソドロジー』せりか書房
- Drucker, P. F. 1993 (上田惇生訳)『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社
- Drucker, P.F. 1999 (上田惇生訳)『断絶の時代』ダイヤモンド社
- Garfinkel, H. 1984 *Studies in Ethnomethodology*. Polity Press.
- H.ガーフィンケル他 (山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳) 1987『エスノメソドロジー —社会学的思考の解体』せりか書房、(ガーフィンケル, サックス, ポルナー, ドロシー・スミス, ヴィーダー等、初期エスノメソドロジーの経験的研究を訳出)
- Heritage, J. 1984 *Garfinkel and Ethnomethodology*. Polity Press.
- 平田オリザ 1998『演劇入門』講談社現代新書
- 今村仁司編 1988『現代思想を読む事典』講談社現代新書
- 近藤里季 2001「知識の表出化の促進に関する研究：ジェンダーの視点から」北陸先端科学技術大学院大学
- 真野薫 2001「創造的対話の促進要因に関する研究」北陸先端科学技術大学院大学
- Leiter, K. 1987 (高山真知子訳)『エスノメソドロジーとは何か』新曜社
- 中村雄二郎 1979『チェーホフの世界』白水社
- Nonaka, I.& Takeuchi, H. 1996 (梅本勝博訳)『知識創造企業』東洋経済新報社
- 野中郁次郎 1999「組織的知識創造の新展開」『ダイヤモンドハーバードビジネス』

1999 年 9 月号 pp38-48

野中郁次郎・遠山亮子・紺野登 1999 「『知識創造企業』再訪問」『組織科学』Vol.33 No.1, pp35-47

Polanyi, M. 1980 (佐藤敬三訳)『暗黙知の次元』紀伊国屋書店

Polanyi, M. 1985 (長尾史郎訳)『個人的知識—脱批判的知識をめざして』
ハーベスト社

佐々木基一 1990『私のチェーホフ』講談社

Shimizu, H. 1995 “Ba-Principle: new logic for the real-time emergence of information” *Holonics*, Vol.5 No1, pp67-79

Schutz, A. 1980 (森川眞規雄・浜日出夫訳)『現象学的社会学』紀伊国屋書店

庄司哲 2001「対話における沈黙の作用についての研究」北陸先端科学技術大学院大学

Toffler, A. 1990 (徳田二郎訳)『パワーシフト』フジテレビ出版

山田富秋・好井裕明編 1998『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房

好井裕明 1999『批判的エスノメソドロジーの語り—差別の日常を読み解く』

謝辞

まずは何より藤波努助教授に深く感謝の気持ちを表したいと思います。提出期限が迫っているときに自分のペースを崩そうとしない私を、温かく見守ってくださり、さらに研究の方向性やアドバイス、励ましを与えてくださったことに対してひそかな喜びを感じたとともに、とにかくほんとうに助けて頂きました。ここに改めて感謝の意を表します。

そして同年度に知識科学研究科に入学した中川弘隆君と原田哲治さんにも感謝の気持ちを表したいと思います。もしお二人がおられなかったら今こうやって謝辞を書いていることもなかったでしょう。

さらに國藤研究室、藤波研究室の皆さんにも感謝の意を表します。短い間でしたけれども、途中から入ってきた私をなにげなく迎え入れてくれたおかげで、愉快的気持ちで研究することができました。

そして、文献を探すのに時間を割いてくれた妹尾先生やいろいろなご心配やご配慮を頂いた知識科学研究科の先生方や友人に感謝致します。

最後に、両親と家族に感謝の念を捧げたいと思います。僕がどういう状況にあらうとも、まるでどこ吹く風のごとくいつもと同じように接する姿を見るにつれて、私はとっても楽になり、そして何か大切なものを思い出させてくれました。本当にありがとうございました。